校友時報

昭和48年9月27日
編集人兼発行所
秋田県能代市逢分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　大勝堂印刷所

会員と歩む
全員の生徒会めざす

役員改選される
相変らず信任投票

◇…生徒会役員改選が九月十三日（木）に行なわれた。ことし二、三年前から生徒会自治の…◇
◇…力でという意志と政策を持った候補者の熱戦繰まる演説会は見受けられなくなった。今回…◇
◇…は、正副会長、正副団長に各一名ずつの候補者があり、信任投票で全員が信任された。…◇

（会長の演説）

去る九月十三日、生徒会正副会長と応援団正副団長の選挙が行なわれた。生徒会の役割、本質はともかく存在の理由さえもはっきりとされないでいる以上当然かもしれないが、今年もまた年中行事の一つとして通り過ぎてしまった。

立候補者は会長に菊池二三君（2A）、副会長に佐々木文明君（2F）、団長に奈良博文君（2A）、副団長に日沼亮雄君（2F）が、それぞれ立候補し立会演説会では次のような演説をした。会長候補の菊池君は「会員ともに歩む会員の生徒会をめざし、生徒会が会員の唯一の発言の場であることを再認識してもらう」と公約し、副会長候補の佐々木君は「会長の手助けをする」と公約した。団長候補の奈良君はこの校舎最後の応援団長としての決意と自信を表明し、副団長候補の日沼君は過激な論を言うかもしれないが、自動車を運転する者の多くが、スピードオーバーして運転したら、こんなことになるのでは。と言っても、これはあくまで極論でしかない。ただ守るべき規則は守らなければならないということだ。

欠ける具体的目標

今回の立会演説会での会長、副会長の演説では具体的な政策・目標が今ず聞けなかった。それでも七割弱の信任票を得て信任されたこれは今後に大きな陰を投げかけている。具体的目標なしに生徒会を運営するということはその場しのぎに終わってしまいあとには何も残らないのではなかろうか。

会員の意見や提案にたるものならば正副会長ならいらないはずである。一般生徒は候補者が最初に掲げた政策の実現を信じて信任投票する。会員とともに歩む会員の生徒会というものは具体的目標の達成、企画した行事の成功によって初めて姿を表わすものではないだろうか。

高校生と規則

部説

われわれの周囲には、校則を始め、刑法、民法、憲法といった六法をふくめてあらゆる規則が取り巻いている。朝、起きてから寝るまで、というより寝ている間中もつきまとっているわけである。法律を犯すせば裁判をうけ罰金なるものを取られたり、時として、社会からかくされた所、ブタバコ、といったよび名の所へ入れられるのである。

ところで、生徒手帳を開いてもらいたい。九ページから「秋田県立能代高等学校校則」というのが載っている。これにはあたりまえの規則が載っているようすきない。問題はその次である。「生徒に関する諸規定」の「服装について」という欄である。そこには生徒に関する諸々の規則が朗々と記されているわけであるが、その制服制規定しておくことはない。当然生徒の意見にあわせて改正されるものであるはずだ。生徒会の服装等検討特別委員会の調査でも、制帽を着用してきたものは三割くらいである。また、制服も近年自由化になるであろうという予測はできない。

さて、この生徒に関する諸規定の服装というのは、そんなに重要なものであろうか。これは、昔からの規則であって、おそらく、制服制帽が当然の如くとられていた時代の残りではないだろうか。とる。しかし、ここで、当然規則いって今すぐになせるというものでないかもしれないし、またないし、「そんなことはまかりならない」というわけで、何年前からくなるものではないかもしれないが、これらは、生徒を束縛するものでもないし、するべきものでない。生徒に関する規定であるから生徒の意志や気持ち、世情にそぐわなくなってきた以上、これをこのまま生徒に関する諸規定として改正なると思ったらそうではないって、今までのようにいかないもしれないが、これからは、生徒を束縛するものでもないし、するべきものでない。生徒に関する規定であるから生徒の意志や気持ち、世情にそぐわなくなってきた以上、これをこのまま生徒に関する諸規定として

ところで、そんな規則ならはだれもそうだればよいではないかだ。

と考え勝ちであるが、これをつきつめると、みんなが、人殺しをする規則・法律を守らなければ社会がなり立たないように、校則を守らなければ、学校も成り立たない。しかし、時代やわれわれにあわなくなった規則は、どんどん改正していく姿勢がほしい。「悪法も法」という言葉がある。しかしわれわれがその規則に甘んじてはいけない。絶対に拒否したいものだ。

（鈴木）

見通しつかぬスクールバス

新校舎は、いま第一期工事に入っている。一期工事で普通教室二十一棟が出来上がっている。一期では、管理棟、特別教室などが完成する予定である。さらに第三、四期工事、五期工事では、軟式球場やプールなどが計画され、来年の秋、十一月ごろまでには、全て完成することになっている。

校舎の移転で通学方法に問題が出てくる。今のところ、スクールバス設置の話が進められている。建設省工事事務所では、校舎完成ごろまでに未完成ながらも東能代駅から学校までの道を通す予定であるが、その道路に秋北バス会社がバスを運行させてくれるか不明である。その事は、これかっの話し合いで決定される。

しかし、バスの運行がだめな場合は、完全道路完成まで、汽車通学生徒は、徒歩または自転車通学にならざるを得ない状態になる。

校舎の移転は通学方法に負けない応援団を作ることを約束した。

各教室で投票したのち、生物室で開票にうつり約一時間ほどで結果が判明した。結果は次のとおりである。会長候補の菊池君が六百八十九票、副会長候補の佐々木君は六百五十一票、団長候補の奈良君は八百一票、副団長候補の日沼君が八百一票とそれぞれ二分の一以上の信任票を得た。各学年での四人得票数の順序は各学年共通で、また四人全員、自分のクラスからは多数の信任票を得た。

いざ十里
強健な体力と精神力養う

恒例行事の十里強歩が、九月十四日、午前零時のスタートで行なわれた。

前日までの雨降りで、天候が心配されていたが、どうにか、こうにか、雨は上がり、予定どおり開催された。だが、水たまりなどがあったりして、道路状態は悪かった。今回は、羽立と黒瀬間の県道が工事中であったために、少しコースが変更され、全距離は三十八・八十九キロメートルと若干短くなった。次回には、新装となった県道を新校舎から出発して利用することになるだろう。

また、女性徒の前回までの森岳ゴールを変え、森岳より二時間出発となった。森岳公民館に午前零時集合し、スタートまでの四時間ほどを待ったのは大変であったが、これによって、今までにはない光景が見られた。昨年までは、男女のせりあいなどは女性徒にとって困難であったが、森岳を二時間前後で通過して、疲れの見える男生徒を相手に、デットヒートを演じた女生徒の姿や、女生徒に会えなかったと不ヤク男生徒になる。もしかすると、今年の妊記録は、女生徒の森岳スタートに支えられていたかもしれない。女生徒に会いたい一心の力走では（？）。

十里強歩の目的は、「十里を歩きとおすほどの強健な体力と精神力をつける」というものであるが生徒にとっては、一種の楽しみになっている。

今回は、諸注意のとき、少しだけは走ってもよい認められ、心ひそかに完走を目標とした生徒には、かえって楽しみの一つがなくなったような雰囲気もあった。

落伍者は、十数名という、まれにみる多人数である。これは、精神力、体力の限界だけではなく、歩くのにあき、車に乗せてもらうなど、という人もいるせいか。

腰落ちつけて、ドサ。（森岳関門にて）

第14回 能高祭準備整う

生徒会最大の行事のひとつである第十四回能高祭が八、二九、三十日の三日間にわたって開催されようとしている。今回のテコは H・R・テコの十六、クラブテコの十二、個人テコ（の計三十のテコが計画されている。また、ステージでは、有志によるフォーク、ロック、演劇部による「授業」が上演され、体操場では「A、一Bのフォークが計画されている。食堂は、一、二年の女生徒と募集したウエーターでがんばることになっている。前回はフォークダンスの練習の段階が問題になったが、事前の練習が必要なのではないだろうか。企画側では会員が参加し楽しめる様に配慮したとのことで大いに期待したい。

なお、テーマは前回の様に「青春の詩」というテーマが掲げられていたにもかかわらず、テーマと内容の関係のないものが多く、意味のないテーマとして残されただけであったため今回の廃止に至った。「テーマ」のない学校祭でどれくらい個性が発揮できるか今回の課題であろう。

（準備にいそしむ2F）

スチール机を購入

先日、体操場の一角に置かれていた真新しいスチール机、三百二十余が木机を使用している各教室に配置されることになった。

この購入は、新校舎に移転するに至って、木机では、床に傷を付けるということから行なわれたものである。

また、四十余の不足分があるがいずれ校舎移転までには、すべて揃うとのことである。

これで、木机を使用するクラスは、二Fの一部と三Gの二クラスだけとなる。

漫点

▼最近気がついたことであるが英語の単語帳が非常に高くなっている。灯油の値段も十リットルで、五百円になるとか、ならないとか。これからもわかるように、物価が非常に高くなってきた。これまでは、田中さんの人気が落ちることはあいである。それでなくても、落ちぬなのであるから。

▼田中さんの話ばかりくらいにして、ほんとうに何から何まで値段が上っている。先生方に関係のあるところでは、まずお酒。これがこのまえに値上げとあいなった。これで毎日（毎晩かな）の晩しゃくの量が少しへったのではないかと思う。これは考えてみれば、健康のためにはよいことと言えなくもない。我々に関係のあるところでは、インスタントラーメンとかパン等々。べつに私が食い意地がはっているというわけではないが、こういった食料品から、ベニヤ、紙の類、文房具、本、といった文化祭関係のものと数えればきりがない。

▼政府が、物価上昇を何パーセントにおさえるとか、物価調整をするといっても、その実、なんの効果も上がってないではないか。公共料金の国鉄料金は上げるし、公約は守らない。これじゃいいとこなしじゃないか。え、どうするんだって、え、え、どうしてくれる。え、え、とまあ、宣伝文句じゃないが言ってみたくもなる。物価をさげるというのであれば、そのための政策をもっと強力におし進めたらいいではないか。

▼物価が上がればわれわれも、こまる。いままで四個買えたものが三個しかえなくなったり。かといって、親のスネかじりのわれわれでは、この物価高にとずかい上げろと言いずらいし。結局食べるのを、ひかえることになるのであろう。田中さん、そうなったら人気はもっと落ちますよ。なぜなら、「食い物のうらみはおそろしい」と申すじゃありませんか。ねー